

Ⅱ．小学部

1．小学部研究の経緯

1) 小学部における教科別の指導の研究経緯

小学部では、2017年4月に告示された特別支援学校小学部学習指導要領を踏まえ2018年度より、小学部カリキュラムにおける教科の目標や内容の位置づけの検証と各教科等を合わせた指導における算数・国語の授業実践研究に取り組んできた。続けて2021年度より、学校運営方針並びに全校研究方針に基づいて小学部カリキュラムの見直しを行い、これまで各教科等を合わせた指導で取り扱ってきた国語科、算数科、生活科の内容を教科別の指導として取り組んでいる。

2022年度からは研究開発学校指定事業を受託し、学校研究方針に基づいて生活科の授業研究を重ねてきた。昨年度は、「小学部生活科カリキュラムにおける小学校学習指導要領『生活科』『社会科』との連続性の検討」、「教科等横断的な学びについての整理」、「児童の学習と教師の指導改善につながる学習評価の検討」を方針とし、研究に取り組んだ。成果として、これまでの単元配列表や単元計画をベースとし、特別支援学校生活科の内容を全て網羅した上で、小学校生活科の目標・内容との連続性を検討したところ、特別支援学校生活科と小学校生活科では題材レベルで共通点が多いという気付きから、これまでの授業実践の知見を活かした学びの工夫について検討することができた。一方、小学校生活科の内容に準拠した授業づくりでは、「基本的生活習慣」や「日課・予定」、「金銭の扱い」といった知的障害教育として必要な項目が十分に扱えないことから、内容を別に項立てして実施するなど、今後の内容の整理も求められた。教科等横断的な学びについては、行事等を中心に据えた大単元として取り扱うことで、各教科で身につける習慣・知識・技能等を明確に設定し、確実に評価することができるようになった。また、大単元として取り組み、生活文脈の中で児童が主体的に学ぶことにより、各教科の内容に沿った学習機会を設定する中で、教科の見方・考え方を意図的に生かしたり働かせたりすることができた。学習評価については、ルーブリック評価を参考に、授業において観察された姿を五つの評価レベルに分けた「目標設定及び評価の目安」を設定し、目標を具体的に落とし込んだ評価表を用いて段階的に評価を行ったことで、形成的な評価や次時・次単元における支援方法の改善に活用することができた。

2) 今年度の取り組み

昨年度までの成果を踏まえ、今年度小学部では、研究開発学校指定事業の3年目として、学校研究方針に基づき、次の3点を方針として、研究に取り組んだ。

- | | |
|---|--|
| 1 | 全国質問紙調査（知的障害特別支援学校の小学部生活科について）の実施と考察 |
| 2 | 知的障害特別支援学校小学部「生活科(草案)」の立案に向けた目標及び内容の整理 |
| 3 | 授業実践を通じた小学校学習指導要領生活科及び理科、特別支援学校中学部「理科(草案)」との連続性の検討 |

1 全国質問紙調査の実施と考察

(1) 目的

本調査は、本校の研究開発課題を踏まえ、知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校（以下、知的障害特別支援学校）における生活科の実施状況と「自立と社会参加」に必要と考える小学校生活科の内容について、全国の教師の意見を調べることを目的とする。

(2) 方法

対象機関は全国の知的障害特別支援学校で小学部を有する538校で、生活科（各教科等を合わせた指導{以下『合わせた指導』と記述}の中での生活科も含む）を行っている教師を対象者として質問紙調査を行った。所属校において特に教科別の学習を行っている学級・集団を想定して回答をしてもらった。2024年9月下旬に各学校に紙面で郵送し、10月末を目処に返送を依頼した。また、Google Form（Google LLC）でも記入・回答をできるようにした。

質問紙については、資料1を参照（pp. 44-45）。

2 「生活科（草案）」の立案に向けた目標及び内容の整理

(1) 目的

特別支援学校生活科と小学校生活科は、その成り立ちの違いから目標と内容がこれまで異なってきた。しかし、特別支援学校学習指導要領（2017）と小学校学習指導要領（2017）においては、生活科の目標がほぼ同様の内容で記載されることとなった。一方で、内容についてはそれぞれの前学習指導要領の影響を強く受けており、特別支援学校生活科と小学校生活科の連続性は弱い（表Ⅱ-1）。そこで、小学校生活科との連続性を踏まえた草案の作成に向け、目標と内容について整理を行うことを目的とする。

表Ⅱ-1 「生活科」の内容

小学校生活科		特別支援学校生活科	
【学校、家庭及び地域の生活に関する内容】		ア	基本的生活習慣
(1)	学校と生活	イ	安全
(2)	家庭と生活	ウ	日課・予定
(3)	地域と生活	エ	遊び
【身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容】		オ	人との関わり
(4)	公共物や公共施設の利用	カ	役割
(5)	季節の変化と生活	キ	手伝い・仕事
(6)	自然や物を使った遊び	ク	金銭の取扱い
(7)	動植物の飼育・栽培	ケ	きまり
(8)	生活や出来事の伝え合い	コ	社会の仕組みと公共施設
【自分自身の生活や成長に関する内容】		サ	生命・自然
(9)	自分の成長	シ	ものの仕組みと働き

(2) 方法

目標及び内容の連続性については、小学部研究会において、それぞれの文言を比較し、知的障害特別支援学校において大事なキーワードとなる用語や記述について意見を出し合い整理した。その上で、目標及び内容の文章をそれぞれ検討した。

内容のまとめや繋がりについて、実践を通して整理を進める中で、これまでの生活科年間計画（図Ⅱ-1）が特別支援学校生活科及び小学校生活科の内容を網羅している一方で、学級間で取り扱う内容や題材の重複が見られることが分かった。そこで、主に研究を進めてきた中学部理科・社会科につながる内容を踏まえ、学年進行も含めた適切な取り扱いについて検討を行った。

小学部 生活科 単元配列表		令和6年度											
月	日	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
学校行事		入学式	始業式	入学式	始業式	入学式	始業式	入学式	始業式	入学式	始業式	入学式	始業式
共通	生活科	支援・着替え 給食準備・昼食・片付け 朝の会・帰りの会						支援・着替え 給食準備・昼食・片付け 朝の会・帰りの会					
合	生活	水で遊ぶ1 （絵本、水の性質、水遊び）		水で遊ぶ2 （絵本、水の性質、水遊び）		水で遊ぶ3 （絵本、水の性質、水遊び）		水で遊ぶ4 （絵本、水の性質、水遊び）		水で遊ぶ5 （絵本、水の性質、水遊び）		水で遊ぶ6 （絵本、水の性質、水遊び）	
合	生活	友達と仲良くなる （学校探検、ミライの体育館で遊ぼう）		お出かけしよう1 （公園に行こう、買い物に行こう）		お出かけしよう2 （公園に行こう、買い物に行こう）		お出かけしよう3 （公園に行こう、買い物に行こう）		お出かけしよう4 （公園に行こう、買い物に行こう）		お出かけしよう5 （公園に行こう、買い物に行こう）	
合	生活	学校・友達を知らう 植物を育てよう		植物を育てよう お出かけしよう1 （公園に行こう、買い物に行こう）		植物を育てよう お出かけしよう2 （公園に行こう、買い物に行こう）		植物を育てよう お出かけしよう3 （公園に行こう、買い物に行こう）		植物を育てよう お出かけしよう4 （公園に行こう、買い物に行こう）		植物を育てよう お出かけしよう5 （公園に行こう、買い物に行こう）	
合	生活	スタートから 季節探しに出かけよう・植物を育てよう		スタートから 季節探しに出かけよう・植物を育てよう		スタートから 季節探しに出かけよう・植物を育てよう		スタートから 季節探しに出かけよう・植物を育てよう		スタートから 季節探しに出かけよう・植物を育てよう		スタートから 季節探しに出かけよう・植物を育てよう	

図Ⅱ-1 小学部「生活科」単元配列表（2024年度版）

3 授業実践を通じた小学校生活科及び理科、中学部「理科(草案)」との連続性の検討

(1) 目的

以上、**1**及び**2**を踏まえ、本校小学部生活科カリキュラムにおいて、小学校生活科及び理科、中学部「理科(草案)」との連続性について検討しながら授業実践を行い、生活科カリキュラムモデル提案についての方向性を示すことを目的とする。

(2) 方法

まず、主に中学部理科につながる内容として挙げられる、特別支援学校小学部生活科「サ生命・自然」、「シものの仕組みと働き」、小学校生活科内容(5)「季節の変化と生活」、内容(6)「自然や物を使った遊び」、内容(7)「動植物の飼育・栽培」の学習がどのように関連しているのか、また理科における科学の基本的な概念「エネルギー」、「粒子」、「生命」、「地球」との関連について検討する。それぞれの内容を確認したところ、扱う題材や教材に関して特別支援学校と小学校の間に大きな違いは見られないことが分かっている。一方で、「生活科の見方・考え方」を生かす授業と、「理科の見方・考え方」を働かせる授業については、学習の展開の仕方が大きく異なるため、理科につながる授業づくりのコンセプトとして、「予想→実験→結果→考察」といった理科の展開へと発展できるよう、生活科においては、「観察する(見てみよう!)→疑問をもつ(なぜだろう?)→試行錯誤する(やってみよう!)→振り返りをする(伝えよう!)」を基本的な要素として取り組むこととした。

理科につながる内容の実践については、「2. 授業づくりの実際」で紹介する。

(文責：Ⅱ-1 田中翔大、田上幸太)

資料 1

全国質問紙(知的障害特別支援学校の小学部生活科について)

※調査対象者は、**小学部で生活科(合わせた指導の中での生活科を含む)**を行っている先生にご記入をお願いします。
 所属校において特に教科別の学習を行っている学級・集団を想定してご回答ください。
 回答は、選択肢の中から当てはまる箇所に○をつけてください。複数選択が可能なものについては、下線を引いています。
 回答にかかるおおよその時間は10分程度です。

回答は、Google フォームでも行うことができます。以下のQRコードを読み取っていただき、回答をお願い致します。



基礎情報の記入

貴校の小学部に在籍する児童の障害種について該当するもの全てに○をつけてください。

学校名	視覚・聴覚・知的
	肢体・病弱

Q1.<時間割上の位置づけ>

①貴校では、時間割に「生活科」を位置づけていますか？

位置づけている (教科単独)	位置づけていない (合わせた指導)
-------------------	----------------------

Q2.<取り扱う内容>

①学部在籍期間に取り扱う生活科の内容の中で、**取り扱いが難しい(扱うことができていない)**と感じるものについて○をつけてください。[複数選択]

ア 基本的生活習慣	イ 安全	ウ 日課・予定	エ 遊び	オ 人との関わり	カ 役割
キ 手伝い・仕事	ク 金銭の扱い	ケ きまり	コ 社会の仕組みと公共施設	サ 生命・自然	シ ものの仕組みと働き

差し支えなければ、その理由をおしえてください。

[]

②学部在籍期間に生活科の指導要領の「内容」を、どのくらい取り扱うことができていると感じますか？

10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%	100%
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------

③本校では、小学部生活科との連続性について研究をすすめています。そこで、「自立と社会参加」※につながると思う内容について点数で表してください。

※「自立と社会参加」:本校の教育目標。将来生活を送るにあたって、日常生活や職業場面等で求められる力

- 1 日常生活や職業場面で求められると**思わない** 2 日常生活や職業場面で求められると**あまり思わない**
 3 日常生活や職業場面で求められると**思う** 4 日常生活や職業場面で求められると**とても思う**

(1) 学校と生活 ・学校生活に関わる活動を行う	1	2	3	4
(2) 家庭と生活 ・家庭生活に関わる活動を行う	1	2	3	4
(3) 地域と生活 ・地域に関わる活動を行う	1	2	3	4
(4) 公共物や公共施設の利用 ・公共物や公共施設を利用する活動を行う	1	2	3	4
(5) 季節の変化と生活 ・身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わったりするなどの活動を行う	1	2	3	4
(6) 自然や物を使った遊び ・身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を行う	1	2	3	4
(7) 動植物の飼育・栽培 ・動物を飼ったり植物を育てたりする活動を行う	1	2	3	4
(8) 生活や出来事の伝え合い ・自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を行う	1	2	3	4
(9) 自分の成長 ・自分自身の生活や成長を振り返る活動を行う	1	2	3	4

差し支えなければ、その理由をおしえてください。

[]

Q3.<教科書等の活用>

①実際の授業では、教科書等をどのくらい活用していると感じますか？(教科書等を参考に授業を計画することも含みます)

0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%	100%
----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------

②実際の授業で活用しているものに○をつけてください。[複数選択]

参考書・事例集	指導要領 (解説も含む)	星本 せいかつ☆、☆☆、☆☆☆	小学校生活科の教科書 (教師用指導書も含む)	活用しない/その他 []
---------	-----------------	--------------------	---------------------------	------------------

Q4.<自由記述>

その他、生活科に関する指導を行う中で困っていることや、本校の研究に関するご意見やご要望がありましたら、ご自由にお書きください。

--

ご協力いただき、誠にありがとうございました。

2. 授業づくりの実際

1) 小学部 1・2年（はな組）の授業実践

(1) 単元の概要

学部・年/組	教科等	時数（想定）	実施時期	作成者
小学部/はな組	せいかつ	3回（3時間）	6・7月	宇佐美

1. 単元名

「うかぶかな？しずむかな？」

2. 単元の構想

(1)	学習者の興味・関心 (児童・生徒観)	はな組では例年 6・7月にビニールプールを校庭に出し、水遊びを行っており本年度も同様に計画をしている。子供たちの興味関心も高い活動であり、この時期を楽しみにしている児童も多い。このことから、水遊びと同時期に水の性質を学習し理解することで、より楽しく水遊びに取り組めるようになると考えた。
(2)	学習活動・教材 (単元・題材観)	本単元ではボール、野菜、ペットボトルなどを水に入れてみてどのような動きをするのか観察比較を行う。最初に中空のボールとそうでないものを比べて、両者を切断し断面の形状を確認することで、浮力を生む要素の一つである空気（中空空間）の存在に気づきを促したい。また、本単元は「はなぐみたいむ（合わせた指導）」の授業で行う「水遊び」と連動させて単元を構成する。「はなぐみたいむ（水遊び）」→「せいかつ（うかぶかな？しずむかな？）」→「はなぐみたいむ（水遊び）」という構成にすることで、前半の「はなぐみたいむ」を次の「せいかつ」で扱う教材を水遊びで使う道具として使う「せいかつ」の導入場面とし、後半の「はなぐみたいむ」では前時の「せいかつ」で学習したことを活かして遊ぶという、楽しい実体験を伴う「せいかつ」の学習を実施できると考えた。
(3)	単元の意義・展望 (指導観)	本単元を通して、水に浮かぶものの性質を知ったり気づいたりし、さまざまなものに興味を持ち、生活の中や水遊びなどで積極的に遊べるようになってほしい。

3. 単元目標（単元全体に関わる内容）

単元を通して目指す子どもの姿		
水に浮かぶものと沈む物の違いに気づき、はなぐみたいむで使う遊び道具をつくる。		
知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
・身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、その面白さや自然の不思議さに気付く。[小(6)]・[特シ(イ)]	・身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくることができる。[小(6)] [特シ(ア)]	・身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。[小(6)]

4. 指導計画

次	小単元名	時数	学習活動
1	どっちのボールが浮かぶかな？	1	①6月20日の「はなぐみたいむ」の活動を振り返る。 ②ボールで遊んだ感想を言う。(ボールを沈めて水から飛び出す遊びをしておく) ③ピンポン玉とゴルフボールを水槽に浮かべる様子を見る。 ④一人ずつ順番にやってみる。 ⑤次のはなぐみたいむの話聞く。 ⑥次のはなぐみたいむで使いたい、浮かぶボールを探す。(どのボールが浮かぶか予想する→いろいろなボールを浮かべてみる) ⑦ピンポン玉・ゴルフボールを切断しているところを見る。
2	野菜の船を作ろう	1	①7月3日の「はなぐみたいむ」の動画を見る。 ②野菜でどんなふう遊んだか言ったり、振り返ったりする。 ③野菜で船を作ることを知る。 ④いろいろな野菜を水に浮かべる様子を見る。 ⑤一人ずつ順番にやってみる。 ⑥野菜を切断して断面を見る。 ⑦1次の動画を見て、浮かんだボールが中空であったことを思い出し、野菜と比較する。 ⑧野菜に旗を刺して船を作る。 ⑨次のはなぐみタイムの話聞く。

3	ペットボトルの船を作ろう	1	①7月17日の「はなぐみたいむ」の動画を見る。 ②ペットボトルでどんなふうに遊んだか言ったり、振り返ったりする。 ③次の図工で船を作ることを知る ④ジュースの入ったペットボトルや飲んでジュースを減らしたペットボトル、空のペットボトルを水に浮かべる様子を見る。 ⑤一人ずつ順番にやってみる。 ⑥どのペットボトルを使うか考え決める。 ⑦次の図工、はなぐみタイムの話聞く。
---	--------------	---	---

5. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に向かう態度
①身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、その面白さや自然の不思議さに気付いている。[小(6)]・[特シ(イ)]	②身近な自然を利用したり、身近にある物をつかたりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくっている。[小(6)] [特シ(ア)]	③身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとしている。[小(6)]
参考：特別支援学校学習指導要領		
・物の形状や素材の違い、水に浮かべる方法の違いが水に沈む沈まないに関連していることを知ることができる。[1段階シ(ア)] (生活科)	・物の形状や素材の違い、水に浮かべる方法の違いが水に沈む沈まないに関連していることに興味を持ち遊ぶことができる。[1段階シ(ア)] (生活科)	・水に浮かぶものとそうでないものの違いを感じながら、様々な道具を使い、自ら楽しく遊ぶことができる。[1段階]

6. 単元計画の評価(次年度に向けて) A 概ね妥当 B 要検討

時数：A 概ね妥当 B 要検討()	目標設定：A 概ね妥当 B 要検討()
題材：A 概ね妥当 B 要検討()	教材・環境設定：A 概ね妥当 B 要検討()

小学部1・2年学級(はな組)に在籍する児童は8名(1年生4名、2年生4名)であり、知的障害特別支援学校学習指導要領における生活科の目標については、1段階相当の児童が4名、2段階相当の児童が4名の集団である。

本年度の研究テーマに基づき、生活科において理科へ接続する内容を取り扱う授業として単元を構想する際に大切にしようと考えたことは、児童の興味関心が高いこと、生活から来るもの、そして生活に還るものであることである。本単元は6・7月に実施したものであり、プールのない本校では、例年、はな組はこの時期にビニールプールを校庭に出して水遊びを行っている。児童にとって非常に興味関心の高い授業であり、体育と生活の内容を合わせた授業(名称は『はなぐみたいむ』)として取り扱っている。この授業と生活科の授業を連動させることで、より児童の興味関心の高い活動を設定できるのではないかと考え本単元を構想した。また入浴や水を使った遊びなどのように、身の回りの生活の一部である「水」に関連した活動を設定することで、本単元が児童の日常生活の質を向上させていく一助となればとも考えた。

授業の実際の活動としては、水槽に水を張り、ゴルフボールとピンポン玉・にんじんとピーマン・中身の入っているペットボトルと空のペットボトルなど、水遊びにも使える様々な道具を浮かべたり沈めたりした。そしてその様子を観察したり、道具を切った中を見たりして、浮かぶものと沈むもの違いに気づき、不思議だなという思いをもつことができるような活動を設定した。

本単元「浮かぶかな?沈むかな?」は、小学校生活科の(6)「自然や物を使った遊び」に関する内容と、知的障害特別支援学校生活科の「サ遊び」、「シものの仕組みと

働き」の内容を関連させた取り組みである。単元の目標を、「身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、その面白さや自然の不思議さに気付く。(知識及び技能)」、「身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくることができ、その面白さや自然の不思議さに気付く。(思考力、判断力、表現力等)」、「身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。(学びに向かう力、人間性等)」と設定している。

(2) 他教科との関連

はな組	他教科等との関連					「浮かぶかな?しずむかな?」に関連
	4	5	6	7		
行事	新入生歓迎会	消防写真会	研究授業			
日生						
こくご さんすう						
せいかつ			浮かぶかな?しずむかな?			
はなぐみ たいむ			おてかけしよう! 「買い物にいこう」 みずであそぼう! 絵本の読み聞かせ」「水の性質」「水遊び」			
おんがく						
ずこう		そざいであそぼう 「すなであそぼう」	つくってあそぼう 「くみたてべったん」			
たいいく						

図 II-2 他教科との関連図

本単元は、前述のように各教科等を合わせた指導である「はなぐみたいむ」の水遊び「みずであそぼう!」と連動して計画されている。知的障害のある児童は、実際的な状況下で体験したり、体感したりすることで、様々なことを学び取っていくことができるようになる。そのため、「みずであそぼう」と「浮かぶかな?しずむかな?」の授業を交互に行うことで、児童が学習や題材により興味関心をもち、浮かぶ沈むといった事象に着目できるように、表 II-2 のように授業を構成し、展開した。

表 II-2 生活科と各教科等を合わせた指導の構成と展開

	実施日	教科名「単元名」	位置付け
①	6/19	はなぐみたいむ「水で遊ぼう～ボールがきたよ～」	導入
②	6/21	生活科 1次 「どっちのボールが浮かぶかな?」	実験
③	6/26	はなぐみたいむ「水で遊ぼう～ボールであそぼう～」	実践
④	7/3	はなぐみたいむ「水で遊ぼう～やさいがきたよ～」	導入
⑤	7/8	生活科 2次 「野菜の船を作ろう」	実験
⑥	7/10	はなぐみたいむ「水で遊ぼう～やさいぶねであそぼう～」	実践
⑦	7/17	はなぐみたいむ「水で遊ぼう～ペットボトルがきたよ～」	導入
⑧	7/22	生活科 3次 「ペットボトルの船を作ろう」	実験
⑨	7/24	はなぐみたいむ「水で遊ぼう～ペットボトルシップであそぼう～」	実践

②生活科の1次「どっちのボールが浮かぶかな?」を中心として、①のはなぐみたいむ「水で遊ぼう～ボールがきたよ～」では②で実験をするゴルフボールとピンポン玉を準備し、児童たちにプールで自由に遊んだ。また、教師がピンポン玉を沈めてみたり、ゴルフボールを浮かべようとしてみたりして、児童がボールの水の中における挙動に興味をもてるような働きかけを行った。そして、②では教室で水を張った水槽を用意し、ゴルフボールとピンポン玉を水槽に入れその様子を観察したり、ゴルフボー

ルとピンポン玉を切断し、中を見比べてみたりした。③「水で遊ぼう～ボールであそぼう～」では、②で学習したゴルフボールは沈む、ピンポン玉は浮かぶという事象を理解して遊ぶ時間として設定した。

また、同じ生活科の「お出かけしよう！～買い物に行こう～」では、実験に使う野菜やペットボトルを近隣のコンビニエンスストアに買いに行った。そして図工科では、「砂で遊ぼう（感覚遊び）」において水の中にボールを入れてみたり、「野菜の船を作ろう」「ペットボトルの船を作ろう」の授業で決めた素材を使って、船を作ったりと、様々な授業で教科横断的な取り組みを行った。

（３）指導方法及び教材・教具

本学級は中・軽度の知的障害をもつ児童が多い集団であり、ほとんどの児童が言葉によるやり取りを行うことができる。しかし、学年が小学部低学年で言語力も発達段階初期ということもあり、「浮かぶ」「沈む」といった言葉でその現象を表現したり理解したりすることは難しいと考えた。そこで、浮かんでいる状態のことを「ぷかぷか」、沈んでいる状態のことを「どぼん」というオノマトペで表現することとした。オノマトペは、事物の様態を音で象徴的に表す擬態語であり、「ぷかぷか」「どぼん」という表現を使うことで、知的障害のある児童でも「浮かぶ」「沈む」という実際的な状況を体感することができると考えた。

実際の授業では、導入で前回の「はなぐみタイム」の水遊びの様子を撮影した動画を見てその様子を振り返ることで、何で遊んだのかを思い出し、児童の授業に対する期待感を高めることから始めた。また、様々な素材を見たり触ったりしながら予想をするだけではなく、実際に水を張った水槽に素材を浮かべる活動を取り入れた。

また、ボールなどが浮かぶのか沈むのか考えて予想し、意見を表明するためにカードを準備した。カードは児童の発達段階に応じて二種類のカードを作成し、すべての児童が回答できるよう配慮した。



図Ⅱ-3 2種類のカード

（４）評価方法

本校研究紀要第68集での成果を踏まえ、「目標設定」及び「評価の目安（表Ⅱ-3）」を以下のとおり設定した。ここでは、1次「どっちのボールが浮かぶかな？」における目標を例示として記載する。

目標設定

○同じボールでも浮かぶものと沈むものがあることを知る。【知識及び技能】

目標レベル1：「ぷかぷか」、「どぼん」と言う。

目標レベル2：浮かんでいる状態のボールを「ぷかぷか」、沈んでいる状態のも

のを「どぼん」と答える。

目標レベル1：「からっぽ」、「ぎゅうぎゅう」と言う。

目標レベル2：中空のボールを「からっぽ」、そうでないものを「ぎゅうぎゅう」と答える。

○いろいろなボールに興味をもって水に浮かべて浮くか沈むか観察する。

【思考力・判断力・表現力等】

目標レベル1：「ぷかぷか」「どぼん」のカードから一枚選んで貼る

目標レベル2：正しいカードを選ぶ。

目標レベル3：カードを選んだ理由を考えて言う。

目標レベル1：ボール、水槽に興味をもち、ボールを水に入れる。

目標レベル2：浮かんでくるボールを沈めてみたり、沈むボールを浮かべようとしてみたりする。

表Ⅱ-3 評価の目安

観察された姿	1	2	3	4	5
	<ul style="list-style-type: none">・行おうとしない・機会なし	<ul style="list-style-type: none">・視線を向ける・行おうとする・教師と一緒に 行う(身体ガイダンス等)	<ul style="list-style-type: none">・教師を模倣して 言葉や動作で表現 する・選択肢から選ぶ・教師に依頼し て一緒に行う	<ul style="list-style-type: none">・教師の促し(問 いかけやジェス チャー等)を受け て行う・選択肢を手が かりに自分の言 葉で答える	<ul style="list-style-type: none">・自発的に取り組 む・想起して答える・言葉や動作で 具体的に表現す る

また、授業内だけでなく、日常生活や家庭での発言や表現しようとする姿も、評価の対象とした。保護者には学級通信などで活動の様子を伝え、本授業に関連するような行動や発話があったときや、夏休み中でも関連する言動があったときには、連絡帳などを通じてその様子を伝えていただくよう、協力を依頼した。

(5) 成果と課題

①授業の様子

1次「どっちのボールが浮かぶかな？」(以下、本時)の二日前に実施した「はなぐみたいむ」の授業「水で遊ぼう～ボールがきたよ～」で実際に遊んだ経験のあるピンポン玉とカラーボール、ゴルフボールなどの水中における様子の観察や実験、予想を行っている。プールに、各種ボールが出されると、プールの中でピンポン玉を手で沈め、手を離すとピンポン玉が水面から勢いよく飛び出す様子を楽しむ児童の様子が見られていた。それを受けて、本時では、水槽にカラーボールを沈めて手を離し、水面から勢いよく飛び出す様子を再現している児童がいた。これは、実際にプールで



図Ⅱ-4 ボールが飛び出す様子を再現

これは、実際にプールで

遊んだ経験を教室での学習に活かしていることを示す行動であると考えられる。また、沈んでいるゴルフボールを手で持ち浮かべようとしたり、ピンポン玉を沈めようとしたり、試行錯誤しながら学習に取り組む様子も見られた。このような児童の様子こそが中学部で行う理科の学習のためのレディネスになっていくと考える。

本時の五日後に行われた、はなぐみたいむ「水で遊ぼう～ボールであそぼう～」では、たくさんのゴルフボールやピンポン玉をプールに浮かべ、楽しくダイナミックに遊ぶ姿が見られた。その際に子供達から「ぷかぷかだ～」「どぼんしちゃった」などといった言葉が多く聞かれたことは、本時での学習の成果を示すものであったと考える。

すなわち生活科を中心として、生活科の前に行う水遊びを「導入」、後に行う水遊びを「実践」として位置付け、生活科の3次までを構成することによって、効率的に「導入」「実験」「実践」という学習の流れを作ることができた。この流れは児童にとっては自然な流れであり、見通しももちやすく、どちらの授業にもより積極的に取り組む姿が見られた。

また、「ぷかぷか」「どぼん」という児童にもわかりやすい表現でボールの浮き沈みを表したことで、ピンポン玉は沈むのか浮かぶのか？などの質問に対し、自分の予想をカードで選択し、表明することができた。また図II-7に示したように、児童の発達段階に応じてカードの作りを変えたことで、カードの選択が難しかった児童も、自分の考えを表現することができた。

②児童の変化

1次以降の授業でも1次以上に児童の興味関心が高くなり、様々な野菜を水に浮かべてみたり、大きくて重いカボチャが浮くことに驚嘆したりといった様子が見られた。またペットボトルの船をつくろうでは、「ぷかぷか」であることが船造りの条件であるため、ペットボトルの中に入っている液体を自ら減らして、どのくらい減らしたら「ぷかぷか」になるのかを、楽しみながら試行錯誤する姿が見られた。はなぐみたいむの水遊びでも同様に、プールでダイナミックに野菜の船やペットボトルの船で遊んでいた。



図 II-5 様々なボールで試行錯誤



図 II-6 水で遊ぼうの様子



図 II-7 カードで予想

また、保護者に協力を依頼していた家庭生活における様子の変化であるが、すべての児童が家庭において「ぷかぷか」「どぼん」と発言をしたり、お風呂に色々なものを持ち込んで、水に浮かべてその様子を楽しんでいたりとといった報告があった。以下に、実際に保護者から書いていただいた報告を示す。

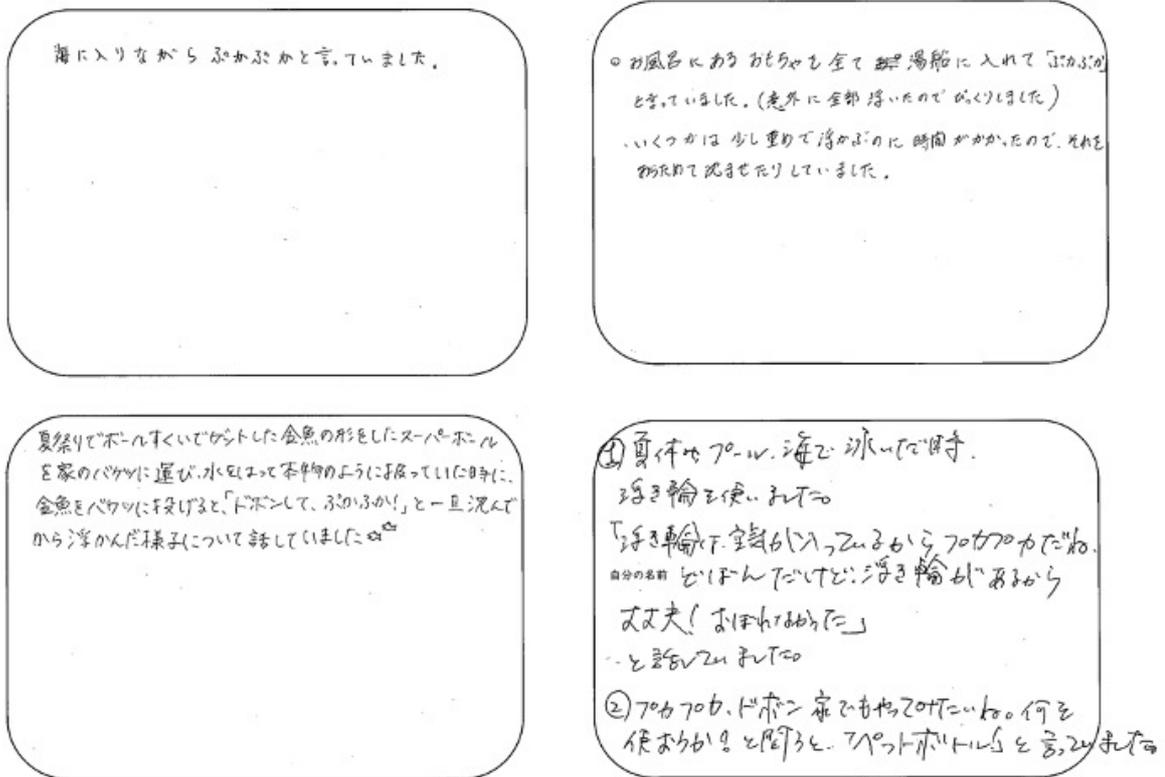


図 II-8 保護者に書いていただいた家庭での様子

このような児童の様子こそが単元を構想する際に大切にしたい、児童の興味関心が高く生活から来るもの、そして生活に還るものであるという担任の思いを達成できたことを示すものであると考える。

(文責：II-2-1) 宇佐美太郎、小笠原志乃、萩野谷七慧)

2) 小学部 3・4 年（つき組）の授業実践

(1) 単元の概要

学部・年/組	教科等	時数（想定）	実施時期	作成者
小学部つき組 3・4 年	生活	4 時間	9 月	當眞

1. 単元名

物と重さ

2. 単元の構想

(1) 学習者の興味・関心 (児童・生徒観)	これまでの生活科では、基本的な生活習慣や手伝い・仕事等の自分の身の回りに関する内容や文京区の街探検等の社会的な内容に取り組んできた。今回、物と重さについての学習は、中学部の理科につながる内容として予想、実験、結果のプロセスを身近にある物の重さを比べてみることで関心を持って取り組むと期待できる。
(2) 学習活動・教材 (単元・題材観)	本単元は、小学校学習指導要領生活科の(6)自然や物を使った遊びに関する内容と、知的障害特別支援学校学習指導要領生活科のサ;遊び、シ;ものの仕組みと働きを関連させた内容である。具体的には、物と重さについて遊びを取り入れながら学習する。物には重さがあり、軽いものと重いものがあること、形を変えても重さは変わらないこと等を粘土や重り等の具体物を操作したり、天秤を使ったりして取り組む。
(3) 単元の意義・展望 (指導観)	実際の指導においては、身近にある物の重さを手に持って比べたり、天秤で比べてみる等、直接的な体験を通して、軽い・重いがわかるようにする。また、児童の理解度や興味関心に応じた手だてを工夫する。

3. 単元目標（単元全体に関わる内容）

単元を通して目指す子どもの姿		
物と重さに関心を持ち、物には軽いものと重いものがあることがわかる。		
知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
・身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、その面白さや自然の不思議さに気付く。 【小(6)】【特:エ】【特:シ】	・身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくることが出来る。 【小(6)】【特:エ】【特:シ】	・身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。

4. 指導計画

次	小単元名	時数	学習活動
1	物には重さがあることを知ろう	1	・身近にある物（ランドセルやペットボトル等）を持ち上げたりして、物には重さがあることを知る。
2	身近にある物の重さを比べよう	2	・直接的に持ち上げて比べるだけでは、重さは正確に測れないことに気付く。 ・天秤を使うことで、重いものと軽いものを比べることが出来ることを知る。 ・2つの物を比べると、「重い」「軽い」「同じ」があることについて知る。
3	物と重さの関係を知ろう	1	・同じ重さの粘土の形を変えても、物の重さは変わらないことを知る。 ・同じ重さの粘土を、伸ばしたり、つぶしたりして形を変えて天秤で測る。 ・天秤で測ると、重さは変わらないこと（同じ）に気付く。

5. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
小(6)自然や物を使った遊び ・身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、その面白さや自然の不思議さに気付いている。	小(6)自然や物を使った遊び ・身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくっている。	・身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとしている。
参考 特別支援学校学習指導要領		
エ 遊び [1段階](イ)身の回りの遊びや遊び方について関心をもっている。 [2段階](イ)簡単なきまりのある遊びについて知っている。 [3段階](イ)きまりのある遊びや友達と仲良く遊ぶことなどの知識や技能を身に付けている。	エ 遊び [1段階](ア)身の回りの遊びに気付き、教師や友達と同じ場所で遊ぶようとしている。 [2段階](ア)身近な遊びの中で、教師や友達と簡単なきまりのある遊びをしたり、遊びを工夫しようとしていたりしている。 [3段階](ア)日常生活の遊びで、友達と関わりをもち、きまりを守ったり、遊びを工夫し発展させたりして、仲良く遊ぶようとしている。	[1段階] 自分のことに取り組もうとしたり、身近な人々、社会及び自然に関心をもち、意欲をもって学んだり、生活に生かそうとしていたりしている。 [2段階] 自分のことに取り組もうとしたり、身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけようとしていたり、意欲や自信をもって学んだり、生活に生かそうとしている。 [3段階] 自分のことに取り組んだり、身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり、生活を豊かにしようとしていたりしている。
シ ものの仕組みと働き [1段階](イ)身の回りにあるものの仕組みや働きについて関心をもっている。 [2段階](イ)身近にあるものの仕組みや働きについて知っている。 [3段階](イ)ものの仕組みや働きに関して関心をもって調べている。	シ ものの仕組みと働き [1段階](ア)身の回りにあるものの仕組みや働きに気付き、それを教師と一緒にみんなに伝えようとしている。 [2段階](ア)身近にあるものの仕組みや働きが分かり、それらを表現しようとしている。 [3段階](ア)日常生活の中で、ものの仕組みや働きかけが分かり、それらを表現している。	

6. 単元計画の評価(次年度に向けて) A 概ね妥当 B 要検討

時数:	A 概ね妥当	B 要検討()	目標設定:	A 概ね妥当	B 要検討()
題材:	A 概ね妥当	B 要検討()	教材・環境設定:	A 概ね妥当	B 要検討()

小学部3・4年学級（つき組）に在籍する児童は8名（3年生4名、4年生4名）であり、知的障害特別支援学校学習指導要領における生活科の目標については、1段階が3名、2段階が4名、3段階相当の児童が1名の集団である。

本単元は、小学校生活科の内容（6）「自然や物を使った遊び」に関する内容と、知的障害特別支援学校生活科の「エ遊び」、「シものの仕組みと働き」の内容を関連させた取り組みである。単元の目標を、「身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、その面白さや自然の不思議さに気付く。（知識及び技能）」、「身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくりことができ、その面白さや自然の不思議さに気付く。（思考力、判断力、表現力等）」、「身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。（学びに向かう力、人間性等）」と設定している。実際の活動においては、鉛筆や消しゴムなど教室にあり二つの物を直接比べたり、天秤を使って比べたりすることで、重い物と軽い物があることや、同じ質量の物は形を変えても重さは変わらないことに気付くことを意図して取り組んだ。また、授業展開の工夫として、遊びの要素を取り入れて、重い箱と軽い箱を児童が選択し、チームで箱運びゲームをしたり、教室の中にある小物を集めてきて、それを天秤で比べたりする等、学習活動に意欲的に参加できるように設定した。

（2）他教科との関連

生活科「物の重さ」に関連して、国語科で取り組んだ単元「言葉と動きで伝えよう③三びきの子ぶた」で、実物のわら、木、れんがを用意して、それを実際に持ち上げて重さを比べる体験をした。また、国語科で使用する教材（わらの家、木の家、れんがの家）は、図画工作科の時間に作成しており、「わらより木は重い」、「木よりれんがは重い」等、重さについて意識的にふれさせながら取り組んだ。さらに、算数科「くらべてみよう・はかってみよう（測定）」で、「重さ」について学習しており、生活科の「物の重さ」と関連させている。また、音楽科「一緒に表現しよう」では、「♪三びきの子ぶた」の音楽のリズムに合わせて動きながら、「わらの家、木の家は軽いから吹き飛ばしてしまったね!」、「れんがの家は、重いから飛ばなかったね!」等と言語化して返す取り組みをした。このように、生活科で学習した「重さ」を、他教科でも関連付けて取り組んだ。

つき組 他教科等との関連		「生活科(物の重さ)」に関連
月	9	
生活	物の重さ	
国語	言葉と動きで伝えよう ③「三びきの子ぶた」	
算数	くらべてみよう・はかってみよう「重さ」	
体育	見て聞いて体を動かそう	
図工	クレヨンや絵の具で描こう	
音楽	一緒に表現しよう	

図 II-9 他教科等との関連

（3）指導方法及び教材教具

1次では、文部科学省著作「せいかつ☆」を参考にして、物には重さがあることを知ること、身近にある物（ランドセルやペットボトル等）を持ち上げてみ

て、重さを比べる学習を行った。中身の入っているランドセルと中身の入っていないランドセルでは、どちらが重いかについて直接、背負ってみることで重さを体感できるようにした（図Ⅱ-10）。また、授業のまとめとして、ワークシート1（図Ⅱ-11）に、気付いたことを記入した。

2次では、文部科学省著作教科書「せいかつ☆☆」を参考にして、物の重さは直接、持ち上げて比べるだけでは正確に測れないことに気付き、天秤で測ることで「重い」と「軽い」がわかることを意図して取り組んだ。例えば、油粘土と紙粘土ではどちらが重いかを、天秤を使って測ってみたり（図Ⅱ-12）、わかったことをワークシート2（図Ⅱ-13）に記入したりする学習をした。

3次では、文部科学省著作教科書「せいかつ☆☆☆」を参考に、物の重さは形を変えても変わらないことを知ることをねらいとして、同じ重さの粘土を四つ用意し、それぞれ「丸い形」、「平たい形」、「細く伸ばした形」、「小さく分割した形」にして天秤で比べてみたり（図Ⅱ-14）、わかったことをワークシート3（図Ⅱ-15）に記入したりする学習をした。



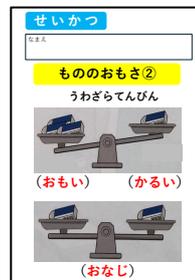
図Ⅱ-10
ランドセルの比較



図Ⅱ-11
ワークシート1



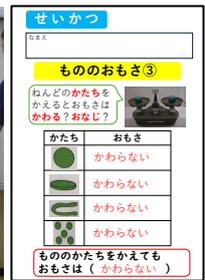
図Ⅱ-12
天秤で測る学習



図Ⅱ-13
ワークシート2



図Ⅱ-14
形を変えた粘土



図Ⅱ-15
ワークシート3

(4) 評価方法

「評価についてのおよその目安」として1から5の評価レベルを設定し、各目標に対する達成度を評価レベルでチェックできるようにした（表Ⅱ-4）。評価レベルの設定は、レベル2が特別支援学校学習指導要領「生活科」の小学部1段階、レベル3が2段階、レベル4が3段階を想定した目標を達成した姿、レベル5が3段階相当の目標を超えたと想定する姿として作成している。本学級では、評価レベル2相当の児童が3名、レベル3相当の児童が4名、レベル4相当の児童が1名である。

表Ⅱ-4 評価についてのおよその目安

	1	2	3	4	5
評価レベル	評価規準に迫る様子が見られない	1段階の目標を達成したと想定する姿	2段階の目標を達成したと想定する姿	3段階の目標を達成したと想定する姿	3段階の目標を越えたと想定する姿
観察された姿	<ul style="list-style-type: none"> 行おうとしない 機会なし 	<ul style="list-style-type: none"> 視線を向ける 行おうとする 教師と一緒に行う(身体ガイドダンス等) 	<ul style="list-style-type: none"> 教師を模倣して言葉や動作で表現する 選択肢から選ぶ 教師に依頼して一緒に行う 	<ul style="list-style-type: none"> 教師の促し(問いかけやジェスチャー等)を受けて行う 選択肢を手がかりに自分の言葉で答える 	<ul style="list-style-type: none"> 自発的に取り組む 想起して答える 言葉や動作で具体的に表現する

(5) 成果と課題

①授業の様子

実際の授業においては、児童が興味・関心をもって取り組む様子がみられた。第1次の授業では、物が入っているランドセルと、何も入っていないランドセルを直接、背負って重さを比べる場面で、「重いよー」と言って床に座ったり、児童が軽々と背負っている場面で教師が、「軽いね」と言語化したりすることで、「重い」と「軽い」の概念と言葉の一致を図った。また、国語科の『三びきの子ぶた』で使用する実物のれんが、木、わらを直接、手にとってみることで、れんがが一番重いことや(図Ⅱ-16)、木やわらはそれより軽いことを知った。

第2次の授業では、教室にある小物(鉛筆、消しゴム、テープ、穴あけパンチ、積み木等)を、天秤を使って重さを比べる学習をした(図Ⅱ-17)。また、天秤の皿が下がった方が「重い」、上がった方が「軽い」ということをワークシートにまとめることができた(図Ⅱ-18)。

3次の授業では、同じ重さの粘土を四つ用意し、その形を変えたとしても重さは変わらないことを学習した。児童から「同じだ!」や、「変わらないね」等の発言があった。

① 児童の変化

生活科の授業で、「物の重さ」について取り組んだことで、生活科以外の場面でも、児童が「重い」、「軽い」の言葉を使うようになった。例えば、自分のかばんを持ち上げて、「重い」と言ったり、プリントを持って、「軽い」と言ったりする様子がみられた。また、国語科で取り組んだ、『三びきの子ぶた』のおおかみが、れんがの家を吹き飛ばそうとする場面で、「重いから飛ばないよー」等の発言があった(図Ⅱ-19)。さらに、「箱運びゲーム」の際に、「重い、重い」と言いながら箱を運んだり(図Ⅱ-20)、「次は軽い箱にしよう」と言って、軽い箱を選択したりする様子がみられた。このようなエピソードから、生活科で学習した「物の重さ」に関する知識や技能を、他の場面においても活用していることがわかる。



図Ⅱ-16
れんがの重さを確かめる様子



図Ⅱ-17
集めた物を天秤で測る様子



図Ⅱ-18
ワークシートに書き込む様子



図Ⅱ-19
れんがの家を吹き飛ばそうとする場面



図Ⅱ-20
箱運びゲームの様子

(文責：Ⅱ-2-2) 當真正太、田上幸太、門野あすか)

3) 小学部5・6年(そら組)の授業実践

(1) 単元の概要

学部・年/組	教科等	時数(想定)	実施時期	作成者
小学部そら組(5,6年生)	生活	9時間	11月	田中

1. 単元名

あきのおもちゃでたのしもう

2. 単元の構想

(1)	学習者の興味・関心 (児童・生徒観)	4月から実施の単元「季節探しに出かけよう」、「植物を育てよう」を通して、季節の植物を探したり、ししとうやミニトマトを育てたりする学習経験から、植物に興味をもったり、自然に親しみをもったりしている。公園で拾ったどんぐりを、学校に持ってきて紹介する姿も見られた。音楽の授業では、季節の歌やダンスに親しみ、楽しく表現しようとする様子があり、体育の授業では、カゴに向けて玉を投げ入れる学習に意欲的に参加している。生活の前単元「つくってあそぼう」では、作ったもので遊ぶ楽しさについてもふれ、みんなで楽しく遊ぼうとする姿が見られた。
(2)	学習活動・教材 (単元・題材観)	本単元では、どんぐりや松ぼっくりを使ったおもちゃ作りと遊びを題材とする。1種目のおもちゃ「どんぐりマラカス」は、どんぐりを容器に入れて作る簡易的な楽器玩具である。様々な形のどんぐりに触れながら入れたり、音の違いを楽しんだりすることを通して、その面白さにふれられるようにする。2種目のおもちゃ「あきのみいれ」は、箱状的に秋の自然物を入れて楽しむゲーム遊び玩具である。実際に遊びながら、みんなで楽しめる遊び方を見つけることができるようにする。単元の最後には、小学部の下級生を招待して「秋のお楽しみ会」を開催する。自分たちが作ったおもちゃで、みんなと一緒に楽しく遊べることに気付いたり、これからも遊ぼうとする思いをもったりできるようにする。
(3)	単元の意義・展望 (指導観)	秋の自然物を使ったおもちゃ作りや遊びを通して、自ら自然物に触れたり、おもちゃを媒介にしなが友達に働きかけたりする姿をねらう。また、「自分が遊ぶ」→「友達(学級)と遊ぶ」→「異学年の集団(下級生)と遊ぶ」といった遊びの関わりを広げることで、身近な人々と一緒に喜んだり、喜んでもらったりする経験を重ね、生活を豊かにしようとする素地の育成をねらうとともに、みんなと一緒に楽しみながら協力して遊びを作ろうとする姿を期待する。

3. 単元目標(単元全体に関わる内容)

単元を通して目指す子どもの姿		
身近にあるものや秋の自然物を使ったおもちゃを作ったり、自分たちが作ったおもちゃでみんなと一緒に楽しく遊んだりしようとする姿		
知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、その面白さや自然の不思議さに気付く。【小(6)】【特:エ、シ】	身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくることができる。【小(6)】【特:エ、シ】	身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。

4. 指導計画

次	小単元名	時数	学習活動
事前	(他単元:「季節探しに出かけよう」)		附属小学校敷地内・占春園へ行き、どんぐりや葉っぱといった秋の自然物を収集する。
1	導入 (秋の植物で何ができるかな?)	1	・秋の自然物を収集している画像や動画を見て、振り返る。 ・改めて実物を見たり触ったりして、大きさや色、形の違いについて確認する。 ・下級生を招待し、みんなで遊ぶ「あきのおたのしみかい」を開催することを知る。 ・2種類のおもちゃを作ることを知る。 (・残り時間で、どんぐりマラカスを作成する。作成手順は小単元2と同様)
2	秋のおもちゃを作ろう	2	○「どんぐりマラカス」 ・教員と一緒に手順に沿って作成することを知る。 ・ペットボトルやコップの形や大きさに応じて、どんぐりを選んで入れる。 ・シールやマスキングテープを使って装飾する。 ・マラカスを鳴らして音色を確認し、どんぐりの量や種類を調整する。 ○「あきのみいれ」 ・教員と一緒に手順に沿って作成することを知る。 ・大きさの違う箱を装飾して、的を作る。 ・実際に作ったもので遊んでみて、的の位置や大きさを調整する。
3	秋で遊ぼう!(2/2本時)	2	・音楽に合わせて「どんぐりマラカス」を鳴らして踊る。 ・「あきのみいれ」をする。 ・的の位置や投げる距離、投げる素材を替えたりして遊び方を工夫する。 ・楽しかったところやうまく入れるための工夫などについて伝え合う。
4	「あきのおたのしみかい」で一緒に遊ぼう!	3	・「あきのおたのしみかい」に向けて役割を決め、会場を準備する。 ・下級生を招待し、みんなで「あきのおたのしみかい」に参加する。また、店員役など、それぞれの役割を果たして、友達と一緒に活動する。 ・「あきのおたのしみかい」の片付けをする。
5	振り返ろう	1	・これまでの学習を画像や動画で確認し、ワークシートに振り返りを記載する。 ・気付いたことや分かったこと、感想について発表する。

5. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に向かう態度
①身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、その面白さや自然の不思議さに気付いている。【小(6)】【特:エ、シ】	②身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくっている。【小(6)】【特:エ、シ】	③身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとしている。

参考 特別支援学校学習指導要領		
エ 遊び (イ) ・ [2段階] 簡単なきまりのある遊びについて知っている。 ・ [3段階] きまりのある遊びや友達と仲良く遊ぶことなどの知識や技能を身につけている。	エ 遊び (ア) ・ [2段階] 身近な遊びの中で、教師や友達と簡単な決まりのある遊びをしたり、あそびを工夫しようとしていたりしている。 ・ [3段階] 日常生活の遊びで、友達と関わりをもち、きまりを守ったり、遊びを工夫し発展させたりして、仲良く遊ぼうとしている。	・ 身近にあるものの仕組みや身近な自然、集団活動や遊びに関わる学習活動を通して、身近な人々や自然に自ら働きかけようとしていたり、生活に生かそうとしていたりしている。 ・ 日常生活の中でものの仕組みや関わりのある自然、様々な集団活動や遊びに関わる学習活動を通して、身近な人々や自然に自ら働きかけ、生活を豊かにしようとしている。
シ ものの仕組みと働き (イ) ・ [2段階] 身近にあるものの仕組みや働きについて知っている。 ・ [3段階] ものの仕組みや働きに関して関心をもって調べている。	シ ものの仕組みと働き (ア) ・ [2段階] 身近にあるものの仕組みや働きが分かり、それらを表現しようとしている。 ・ [3段階] 日常生活の中で、ものの仕組みや働きが分かり、それらを表現している。	

6. 単元計画の評価(次年度に向けて) A 概ね妥当 B 要検討

時数：A 概ね妥当 B 要検討 (+2~3時間必要) 目標設定：A 概ね妥当 B 要検討 (知識・技能「自然の不思議さに気付く」、思考判断表現「工夫してつくる」ことが難しい) 題材：A 概ね妥当 B 要検討 教材・環境設定：A 概ね妥当 B 要検討 (身近な生活環境において自然が少ない。また紅葉などの秋の自然物が時期と合っていない)
--

小学部5・6年学級(そら組)に在籍する児童は8名(5年生4名、6年生4名)であり、知的障害特別支援学校学習指導要領における生活科の目標については、1段階が2名、2段階が3名、3段階相当の児童が3名の集団である。

本単元「あきのおもちゃでたのしもう」は、小学校で秋の時期に広く行われている秋探しや身近な自然にあるもので遊ぶ活動を基にしており、子どもたちが自ら自然物に触れたり、自然物を使った遊びを通して関わりを広げることをねらっている。併せて、小学校生活科との連続性を念頭に、おもちゃ作りを通して、自然の不思議さに気付いたり、自ら工夫したりするための素地の育成を目指している。

本単元の前に、単元「季節探しに出かけよう」を設定し、林や森が多くある近隣の筑波大学附属小学校や占春園、教育の森公園で秋の自然物探しを行っている。どんぐりや落ちた葉っぱ、木の枝を収集することを通して、秋の自然物に触れる体験をしている。また、事前に各家庭に協力を求め、どんぐりや松ぼっくりを収集したことで、探し集めたりすることに対して意欲的に取り組む姿が見られていた。

(2) 他教科との関連

本単元を中心に、秋の季節を題材として他教科と関連させながら学習を進めた。また、学習の成果については、下級生を招待した「あきのおたのしみかい(秋祭り)」や学習発表会「大塚祭」で発表することを計画した(図Ⅱ-21)。

国語科では、秋の自然物が登場する絵本を活用し、そこに出てくるものや生き物の名前について学習した。また、挿絵や台詞を通じて、春や夏との違いに着目し、「秋らしさ」のイメージをもつことができた。

音楽科では、「虫のこえ」、「村まつり」(いずれも文部省唱歌)等の歌唱や鑑賞、リズム打ちを通して、秋の代表的な音楽に触れ、秋のイメージを膨らませた。また、体育科でも、どんぐりをモチーフにした表現運動を行い、どんぐりの大きさや形、色が違うことについて着目できるようにした。

月	9	10	11	12
行事				大塚祭
生活	あきのおもちゃでたのしもう			発表会をしよう(大塚祭)
	季節探しに出かけよう・植物を育てよう			
国語	物語を読もう			
算数	いろいろなかたち			くらべてみよう
音楽	一緒に演奏しよう			
図工	秋の自然を表現しよう			
体育	ボールを使ったゲームをしよう 体をたくさん動かし続けよう(表現)			

図Ⅱ-21 他教科との関連図(そら組)

図画工作科では、収集した葉っぱに絵の具をつけて組み合わせたタペストリー作りやどんぐり等を並べて糊付けしたリース作りに取り組むことを通して、秋の自然物に何度も触れられる設定をした。また、秋祭りをモチーフとしたお面作りやおみこし作りを通して、国語科や特別活動との往還も図った。

(3) 指導方法及び教材・教具

本単元は、「自然の不思議さに気付く」ことや「遊びを工夫する」ことを目標とする一方で、その目標に至る前段階として、自然物との触れ合いを活動の主軸に置き、その特徴や変化を比べたり・分類したりすることを通して違いに気付くことも、指導のポイントとして取り上げるようにした。

また、気付きの質を高めるための学習指導の進め方として、試行錯誤や繰り返す活動の設定、伝え合い交流する場の工夫、振り返り表現する機会の設定、児童の多様性を生かし、学びを豊かにする学習活動の設定といった四つのポイントについて留意しつつ、小単元を構成した。

さらに、目標をもって自ら学習に取り組んだり、振り返ったりする姿を目指して、学習前に自分の目標を設定し、授業後に評価する機会を毎回取り入れた(図Ⅱ-22)。レベル2以降を目指して取り組めるように言葉掛けを行った。レベル4以降は、目標についての助言を踏まえながら自分で考え、それに向けて取り組めるようにした。授業中は、「これができたら、レベル〇だね」と肯定的に伝えることを通して、常に目標を意識できるような指導を心がけた。

【じぶんのもくひょう】			
レベル4~ ★★★★	レベル3 ★★★	レベル2 ★★	レベル1 ★
	いくつもはっけんする。やってみる。	ひとつはっけんする。やってみる。	みんなといっしょにいる。
			

図Ⅱ-22 選択する目標

作成するおもちゃ(題材)については、次の2種類を計画した。

「どんぐりマラカス」は、楽器を使って音を鳴らすことを好む児童が多く在籍していることから、本単元の題材に選定した。どんぐりの数や大きさの違いで音が変わることに着目し、工夫したり楽しめたりできるようにした。

「あきのたまいれ」は、収集したどんぐり、松ぼっくり、葉っぱ、木の枝といった秋の自然物を的(段ボール製のカゴ)に投げ入れるゲーム遊び玩具として設定した。容器やカゴに対象物を入れる活動や的に向けてボールを投げる活動を好んで取り組む学習経験を踏まえ、何度も繰り返し取り組めるような題材として選定した。「あきのおたのしみかい」では、下級生を招待し、一緒に遊ぶ学習に取り組むことで、「下級生が入れたくなるのはどんなものだろう?」、「投げて入れやすいものはなんだろう?」という発問に対して、自発的に考えたり取り組んだりできるようにした。また、自然物をカゴに入れる時間と選び取る時間を分けたり、何度も入れられる時間を設けたりすることで、様々な自然物に繰り返し触れられるよう工夫した。

(4) 評価方法

本校研究紀要第68集での成果を踏まえ、「目標設定及び評価の目安」を以下のとおり設定した(表Ⅱ-5)。ここでは、3次「秋で遊ぼう!」における目標を例示として

表Ⅱ-5 目標設定及び評価の目安

評価 レベル	1	2	3	4	5
	評価規準に迫る様子が見られない	1段階の目標を達成したと想定する姿	2段階の目標を達成したと想定する姿	3段階の目標を達成したと想定する姿	3段階の目標を越えたと想定する姿
観察された姿	・行おうとしない ・機会なし	・目線を向ける ・行おうとする ・教師と一緒にいる(身体ガイダンス等)	・教師を模倣して言葉や動作で表現する ・選択肢から選ぶ ・教師に依頼して一緒にいる	・教師の促し(問いかけやジェスチャー等)を受けて行う ・選択肢を手がかりに自分の言葉で答える	・自発的に取り組む ・想起して答える ・言葉や動作で具体的に表現する
児童の目標とするレベル	A児 C児	D児 E児 H児	B児 F児 G児		

○自然物を使った遊びを通して、自然物には種類や大きさ、形があることに気付いている。【知①】

1	2	3	4	5
注目しない。言葉かけに応じない。	楽しかった素材を選んでいる。	どんぐりと松ぼっくりの違いに気づき、選択したり名称を答えたりしている。	的に入っている素材や発見したことについて、種類や形、大きさに注目しながら答えている。	種類や形、大きさに着目し、理由も含めて答えている。

○様々な自然物の中から材料を選び、素材の違いを比べながら、楽しい遊びを作っている。【思②】

1	2	3	4	5
注目しない。言葉かけに応じない。	教師と一緒に投げたいものを選択して、的に投げ入れている。	教師の働きかけに応じて投げたいものを選択し、的に投げ入れている。	様々な素材を比べながら選び、的に投げ入れている。	目的をもって素材を選んだり、入れ方を工夫したりしながら、的に投げ入れている。

記載する。

また、(3)で紹介した自分の目標についての授業後評価についても毎回聞き取り、記録を残した。

(5) 成果と課題

①授業の様子と児童の変化

1, 2次では、「秋のお楽しみ会」に向けての準備として、学習のイメージをもったり、創作活動に取り組んだりした。特に、「どんぐりマラカス」の制作では、聴き比べて中に入れたどんぐりの量を調整する様子や、どんぐりの量に着目して、「どんぐりが少ないと寂しい気持ち。多いと嬉しい気持ち。楽しいのは、たくさん！」と表現する姿が見られた。ただ、単元冒頭においては、自分の目標(レベル3「いくつもはっけんする。やってみる。」)を分かりやすい簡単な言葉で示したことで、の意図するねらい「試したり比べたりすること」から外れて、「たくさん作ること」に注力する児童の姿も見られたことが反省として挙げた。試行錯誤するためには、視点となるポイントを例示(大きさや形、種類など)することで、視点を焦点化できることが改めて分かった。



図Ⅱ-23, 24, 25, 26 1次, 2次の様子

3次では、遊びを楽しむ中で、自ら素材を選んだり、比べたりしながら遊びを考え、そこで気付いたことを振り返る機会を設けた。(4)で示した評価レベル2の児童から

は、好みの感触の自然物を見つける様子や、松ぼっくりを自ら触って素材を選択するなど、目標とするレベルを越えた姿が見られた。評価レベル3の児童からは、どんぐりの形の違いに気付いて好みの丸いどんぐり（くぬぎ等）を選択したり、投げる方法を代えるなど遊び方を工夫したりする姿、様々な自然物に触れて入れ方を工夫する姿が見られた。評価レベル4の児童からは、どんぐりの形や松ぼっくりの大きさなど、示した視点を基に自然物を選ぶ様子が見られた。また、下級生におすすめするものとして、「一番入りやすいのは、松ぼっくり。」、「大きい方がいいよ。」と発表して紹介する児童もいた。一方で、活動は行いつつも、発見したことを発表する際に悩んだり拒否したりする様子も見受けられた。目標を超えて評価レベル5に至った児童が見られなかったことから、自然物の形状や扱いやすさの違いを理由にしながら発表することへの難しさがあつた。



図Ⅱ-27, 28, 29, 30 3次の様子

4次「秋のお楽しみ会」の実施や準備・片付けを経て、5次では振り返りシートの記入を行った（図Ⅱ-31, 32）。生活科の他単元も含め、基本的に同一様式の振り返りシートを用いた。小学校では、絵と文章で記録を残す姿が多く見られるが、記入することが負担になりすぎないように、児童の実態に応じて、写真を自分で選択して貼り付けることができるようにした。3次で発表することが難しかった児童も、4次を経て自分なりの考えを表出したり、表現したりするようになってきた。

児童の変化としては、身近にありながらもこれまで注目してこなかった秋の自然物に対して、はじめは興味がなかったところから、自ら触れようとしたり見ようとしたりする姿が増えてきた。例えば、赤くなってきた葉っぱを見て、「紅葉だよ」と伝えるなど、秋の季節にちなんだ発言が見られるようになった。また、自然物に触ること自体に抵抗感のあつた児童が、自然物の感触に親しむ姿も見受けられた。

② 課題

上記のような児童の成長が見られた一方で、本単位に関しては多くの課題が浮き彫りになってきた。まず、小学校生活科の目標に挙げられる知識及び技能「自然の不思議さに気付く」ことに関して、理科の量的・関係的な視点（エネルギー）及び質的・実態的な視点（粒子）の芽生えが求められる部分であることを踏まえると、「自然の中にある一定のきまり」に気付くまでには今回の実践が至らなかった。現状、知的障



図Ⅱ-31, 32 振り返りシート

害のある児童が在籍する特別支援小学部の実態を鑑みると、原因から結果を推測することは可能であっても、結果から原因を推論することに関しては、難しさがあることが改めて分かったといえる。

さらに、思考力・判断力・表現力等「遊びを工夫してつくる」ことに関しても、生活経験の乏しさやルール理解に障壁があり、困難が生じることも改めて分かった。「遊びの工夫」に関しては、現状の知的障害特別支援学校学習指導要領で示されている内容「エ遊び」を土台として、本実践に発展させる仕組みづくりが必要であった。

最後に最大の問題として、秋の自然物を学習題材として扱うことは、地域差の課題を念頭におく必要がある。今回の実践でも、本校周辺の身近な地域には、紅葉・落葉・どんぐりなどがあまり見られないことが課題であった。他教科との関連や「大塚祭」（学習発表会）との関連を図るためには事前のカリキュラム構成が大切となる一方で、温暖化等の影響もあって不確定な要素が多い題材でもあることを理解しての計画立案が求められる。

このように多くの課題は見られるが、重度の児童が多く在籍する特別支援学校での実践として、小学校生活科及び理科の内容との繋がりについて多くの示唆を得られる事例となった。

(文責：Ⅱ-2-3) 田中翔大、村木友香、末吉玲子)

3. まとめと今後の展望

1) 全国質問紙調査の実施と考察

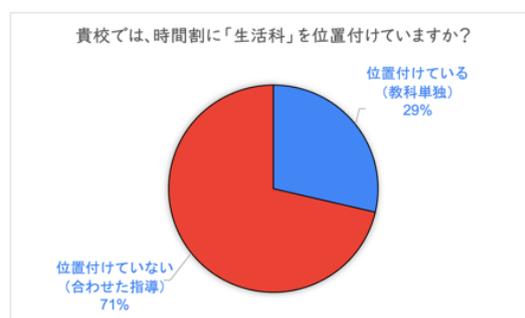
ここでは、全国質問紙調査の結果を示し、生活科カリキュラムモデルの作成に向けた考察を行う。回収率は、対象機関である538校中178校(辞退、複数回答除く)で、33.1%だった。以下、結果を項目ごとに記載する。

Q1. 〈時間割上の位置づけ〉

① 貴校では、時間割に「生活科」を位置づけていますか？

国立特別支援教育総合研究所(2021)や本校研究紀要第67集(2023)等の調査結果を踏まえた上で、現状の位置づけについても改めて確認した。

結果、位置づけている(教科単独)が51校、位置づけていない(合わせた指導)が127校だった。直接確率計算によると、その偶然性は $p=0.0000$ (片側確率)であり、有意水準5%で有意だった。よって、時間割上、「生活科」を位置づけていない学校が多いといえる。これは、国立特別支援教育総合研究所(2021)の小学校3年生[27, 137校]、小学校6年生[31, 137校]、本校研究紀要第67集(2023)の[6, 40校](いずれも前記が教科単独、後記が合わせた指導)と同様の結果となった。



図Ⅱ-33 「生活科」の位置づけ

Q2. 〈取り扱う内容〉

① 学部在籍期間に取り扱う生活科の内容の中で、取り扱いが難しい(扱うことができない)と感じるものについて回答してください。

特別支援学校小学部生活科における12の内容から選択できるようにした。また、その理由についての自由記述欄を設けた。未記入及び「特になし」を選択したものについては、「特になし」として算出することとした。結果は、表Ⅱ-6のとおりである。

取り扱いが難しいと感じる内容について、 1×13 のクロス表を作成し、カイ二乗検定によって有意差を検討した。その結果、5%有意水準で統計的に有意差が認められた

($X^2(12)=549.882, p<.01$)。

ライアン名義水準を用いた結果、「シものの仕組みと働き」と「特になし」は、その他の内容より有意に多いことが明らかとなった(互いの有意差はない)。

表Ⅱ-6 「生活科」取り扱いが難しい内容

ア基本的生活習慣	1校
イ安全	5校
ウ日課・予定	2校
エ遊び	1校
オ人との関わり	3校
カ役割	1校
キ手伝い・仕事	1校
ク金銭の扱い	14校
ケきまり	0校
コ社会の仕組みと公共施設	25校
サ生命・自然	13校
シものの仕組みと働き	83校
特になし	72校

自由記述を見ると、「シものの仕組みと働き」については、「取り扱う内容が多く、シまでたどりつかない。また、理解が難しい児童が多い」、「遊びの中で風船やビニール袋を使ったおもちゃで遊ぶことはあるが、目に見えないものの仕組みは、なかなか授業として扱うことは少ない」（いずれも原文）など、指導の困難さを抱えている記述が多く見られた。また、低学年や重度の児童の理解把握についての難しさについての意見も散見された。

「特になし」については、「合わせた指導の年間指導計画の中で内容の取り扱いを確認している」、「本校では学習指導要領を基に段階別指導内容表を作成し、それには生活科のすべての内容が単元として設定されています」（いずれも原文）など、一年間を通して計画的に取り扱うことについての記述が多数見られた。

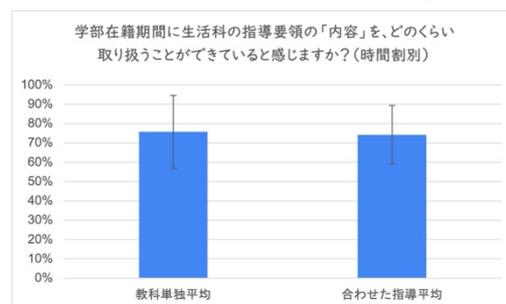
次点で他の内容より有意に多かったものは、「コ社会の仕組みと公共施設」である（「ク金銭の扱い」、「サ生命・自然」との有意差はない）。自由記述を見ると、「生活経験の乏しさや校外での活動の難しさなどで、体験的に学ぶことが難しいように感じる」、「社会の様子について住んでいる居住地が多方面に渡っているため、住んでいる地域がしぼれないため」（いずれも原文）など、立地による難しさに関する記述が多く見られた。

これらの結果から、小学部生活科の内容を網羅したカリキュラムの提案により、全ての内容を取り扱うことができるようになることが予想される一方で、内容によっては学習理解や学習機会の観点で難しさがあることが分かった。難しい面に関しては、本校の授業も含めたカリキュラムユニットモデルを提案することで、学校現場で活用できる方策を示すことが考えられる。

②学部在籍期間に生活科の指導要領の「内容」を、どのくらい取り扱うことができていると感じますか？

10%から100%の10件法で行い、取り扱い状況について確認した。平均値を算出したところ74.66%であった。また中央値については、80%であった。

さらに、教科単独（ $n = 51$ ，平均75.686%，標準偏差18.917）と合わせた指導（ $n = 127$ ，平均74.252%，標準偏差15.138）の違いによって取り扱えている内容に差があるかを比較した（図Ⅱ-34）。



図Ⅱ-34「生活科」扱うことができる内容

数値については、10%を1、100%を10として、全ての値を整数値で計算した。分散分析を行った結果、有意な差は見られなかった（ $F(1, 176) = 0.28, ns$ ）。これにより、時間割の位置づけの違いにより、扱えていると感じる内容の量に差はないことが分かった。

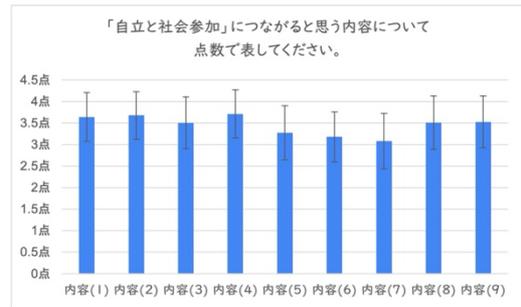
②「自立と社会参加」につながると思う内容について点数で表してください。

「自立と社会参加」は、本校の教育目標であり、将来生活を送るにあたって、日常生活や職業場面等で求められる力であることを明記した上で、内容によって点数に差があるかを比較した（図Ⅱ-35）。分散分析を行った結果、有意な差が見られた（ $F(8, 1593) = 25.43, p < .01$ ）。HSD法を用いた多重比較によると、主に理科につながる内容（5）「季節の変化と生活」、内容（6）「自然や物を使った遊び」、内容（7）「動植物の

飼育や栽培」が平均よりも有意に低かった (MSe=0.3572, $p < .05$)。したがって、主に理科につながる内容は、「自立と社会参加」につながりづらいとされていることが明らかとなった。また、内容(5)、(6)、(7)との間の平均に有意差は見られなかった。

次に、教科単独と合わせた指導の違いによって内容ごとに違いがあるかを比較した。

それぞれ分散分析を行った結果、すべての内容において有意差は見られなかった (内容(1): ($F(1, 176)=0.15, ns$)、内容(2): ($F(1, 176)=0.04, ns$)、内容(3): ($F(1, 176)=0.24, ns$)、内容(4): ($F(1, 176)=0.22, ns$)、内容(5): ($F(1, 176)=2.58, ns$)、内容(6): ($F(1, 176)=0.81, ns$)、内容(7): ($F(1, 176)=1.22, ns$)、内容(8): ($F(1, 176)=0.26, ns$)、内容(9): ($F(1, 176)=0.07, ns$))。



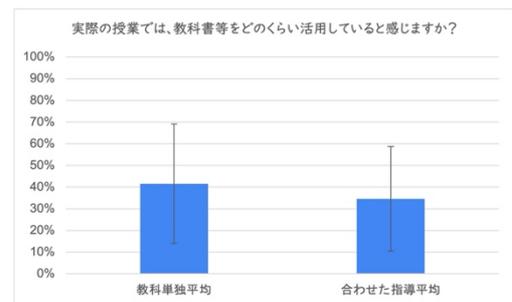
図Ⅱ-35 「小学校生活科」
内容の平均点及び標準偏差

Q3. 〈教科書等の活用〉

①実際の授業では、教科書等をどのくらい活用していると感じますか？

0%から100%の11件法で行い、取り扱い状況について確認した。平均値を算出したところ36.61%であった。また中央値については、30%であった。1校記入漏れがあったため、こちらの項目のみ177校で算出している。

さらに、教科単独 ($n = 51$, 平均 75.686%, 標準偏差 18.917) と合わせた指導 ($n = 126$, 平均 74.252%, 標準偏差 15.138) の違いによって教科書等の活用の違いがあるかを比較した (図Ⅱ-36)。数値については、0%を0、100%を10として、全ての値を整数値で計算した。分散分析を行った結果、有意な差は見られなかった ($F(1, 175)=2.75, ns$)。



図Ⅱ-36 教科書等の活用

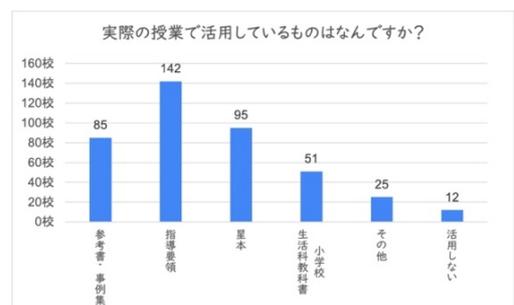
②実際の授業で活用しているものはなんですか？

結果は、「参考書・事例集」が85校、「指導要領」が142校、「星本」が95校、「小学校生活科の教科書」が51校、「その他」が25校、「活用しない」が12校であった (図Ⅱ-37)。「その他」にこの回答としては、一般図書や絵本、動画教材等が挙げられていた。

以上を踏まえ、 1×6 のクロス表を作成し、カイ二乗検定によって有意差を検討した。その結果、5%有意水準で統計的に有意差が認められた ($\chi^2(5)=172.205, p < .01$)。

ライアン名義水準を用いた結果、「指導要領」が全ての項目より有意に多かった。次点で、「参考書・事例集」、「星本」が有意に多かった (「参考書・事例集」、「星本」の間に有意な差は見られない)。

以上の結果から、現場の指導においても、「指導



図Ⅱ-37 授業で活用しているもの

要領」が大きな役割を果たしていることが分かった。また、「参考書・事例集」が多く活用されている一方で、本年度より採択可能な「星本」も同程度の活用がされていることも分かった。「星本」に関しては、Q4.自由記述より、「生活科の星本、教科書解説がとても参考になっている」、「今後は、星本を活用していきたいと考えているため、星本を活用した授業例を教えてほしい」、「小学校生活科の教科書にあるQRコードで関連事項を検索できるものが、星本にあるとよい」（いずれも原文）などが挙げられた。

これらの結果から、指導要領のみならず「星本」についても確認が必要と考える。「せいかつ☆」、「せいかつ☆☆」では、特別支援学校幼稚部教育要領及び幼稚園教育要領との関連が明確に示されている一方で、「せいかつ☆☆☆」では、生活科他領域との関連や中学部社会科・理科との繋がりが大きく意識されている。来年度より、特別支援学校中学部知的障害者用教科書の理科星本、社会科星本が採択可能であることから、学部や教科を越えた検討が必要と考えられる。

Q4.〈自由記述〉

生活科に関する指導を行う中で困っていることや、本校の研究に関する意見や要望についての自由記述欄を設けた。以下に抜粋した記述を記載する。

「来年度から、教科書として、生活科の星本を使用していくことになっており、これまでどおり合わせた指導の中で生活科の内容を取り扱っていくのか、生活科を立ち上げた方がよいのかを学部内で議論、検討をしている。どちらにも良さやメリットがあり、児童の実態に合った指導形態を考えていく必要がある」、「生活科の各内容をしっかりと押さえる部分と、「合わせた指導」として各学級の実態に応じた授業が行える自由さの部分のバランスで、難しさを感じています。先進的な取り組みを色々教えていただきたいです」（いずれも原文）など、生活科の指導において多くの悩みが示された。生活科カリキュラムモデルの提案が求められているといえる。

また、「生活科が中・高の理社職家等のどの教科のどの内容につながっているか、連続しているのか、まとまった資料があれば参考にしたいと思っています」、「生活科と特活の活動内容がかぶるところがあり、どちらで取り組むか悩むところである」、「伊安全の指導内容に【避難訓練】があるが、特別活動にも学校行事の中に避難訓練が位置付けてあるなど、生活科と算数、特活または道徳と重なるところがあるため、見直し精選できないか。さらには、知的特別支援学校用の特活と道徳の学習指導要領を作成し、生活科との関連をわかりやすく示してほしい」（いずれも原文）など、他教科等との関連についての悩みも多く見られた。本校が培ってきた生活文脈の中での繋がりのある教科等横断的な学びの整理が、今後も求められる。

2)「生活科（草案）」の立案に向けた目標及び内容の整理

(1) 目標の整理

以下は、知的障害特別支援学校小学部「生活科（草案）」の目標案として検討したものである。下線は小学部研究会の中で、重要であるという意見が多く挙げられ、特に検討を行った文言である。それぞれの文言についての補足説明も示す。

目標

具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身につけるようにする。
- (2) 自分自身や身の回りの生活のことや、身近な人々、社会及び自然を自分との関りについて捉え、考えたことを表現することができるようにする。
- (3) 自分のことに取り組んだり、身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり、生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

①「身近な生活」

生活科の学習過程において、「見方・考え方を生かし」としているのは、幼児期における未分化な学習との連続性の観点からである。そのコンセプトを鑑みるのであれば、「身近な生活」、「生活上」といった要素を記載することが適当であると考える。

②「自分自身や身の回りの生活」、「自分のことに取り組んだり」

「身の回りの生活」とは、児童が日々の生活を過ごしていくために必要な事柄であり、具体的には、食事、排泄、清潔等を指している。これは、知的障害教育に欠かせない「基本的生活習慣」に関わる内容のため記載している。「自分自身」、「自分のことに取り組む」ことについても、それらについて考え、それらを何らかの方法で表現することは知的障害教育に欠かせない要素として記載することが適当であると考える。

(2) 内容の整理

内容の対照結果を踏まえ、小学校生活科の各内容項目に相当する特別支援学校生活科の内容について表Ⅱ-7のようにまとめた。表Ⅱ-7に入っていないものは、「ア基本的生活習慣」、「イ安全」、「ウ日課・予定」の主に基本的な生活習慣に関する内容及び、「ク金銭の扱い」であった。こちらについては、知的障害教育に欠かせない内容であり、社会生活の下支えとなる学習内容として別立てとすることにした（表Ⅱ-8）。

上記内容をまとめたものを、図Ⅱ-38として示す。

表Ⅱ-7 「生活科」の内容整理①

小学校生活科	特別支援学校生活科
【学校、家庭及び地域の生活に関する内容】	
(1) 学校と生活	オ・カ
(2) 家庭と生活	カ・キ
(3) 地域と生活	オ・コ
【身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容】	
(4) 公共物や公共施設の利用	ケ・コ
(5) 季節の変化と生活	サ
(6) 自然や物を使った遊び	エ・シ
(7) 動植物の飼育・栽培	サ
(8) 生活や出来事の伝え合い	オ・カ
【自分自身の生活や成長に関する内容】	
(9) 自分の成長	カ・キ

表Ⅱ-8 「生活科」の内容整理②

小学校生活科	特別支援学校生活科	下支えとなる主に基本的な生活習慣に関する内容及び特別支援独自の内容(ク)
【学校、家庭及び地域の生活に関する内容】		
(1) 学校と生活	オ、カ	イ 安全 ク 金銭の扱い
(2) 家庭と生活	カ、キ	
(3) 地域と生活	オ・コ	
【身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容】		ア 基本的 生活習慣
(4) 公共物や公共施設の利用	ケ・コ	
(5) 季節の変化と生活	サ	ウ 日課・ 予定
(6) 自然や物を使った遊び	エ・シ	
(7) 動植物の飼育・栽培	サ	
(8) 生活や出来事の伝え合い	オ・カ	
【自分自身の生活や成長に関する内容】		
(9) 自分の成長	カ・キ	

小学校生活科		特別支援学校生活科	
【学校、家庭及び地域の生活に関する内容】		ア	基本的な生活習慣
(1)	学校と生活	イ	安全
(2)	家庭と生活	ウ	日課・予定
(3)	地域と生活	エ	遊び
【身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容】		オ	人との関わり
(4)	公共物や公共施設の利用	カ	役割
(5)	季節の変化と生活	キ	手伝い・仕事
(6)	自然や物を使った遊び	ク	金銭の取扱い
(7)	動植物の飼育・栽培	ケ	きまり
(8)	生活や出来事の伝え合い	コ	社会の仕組みと公共施設
【自分自身の生活や成長に関する内容】		サ	生命・自然
(9)	自分の成長	シ	ものの仕組みと働き

図Ⅱ-38 「生活科」の内容整理まとめ

「生活科（草案）」の内容については、特別支援学校生活科と小学校生活科をつなぐものとして、小学校生活科「内容構成の具体的な視点」を活用する案など、これまでもさまざまな検討がなされてきた。現在取り組んでいる学習内容や題材との繋がりを改めて確認し、まずは目の前の児童の思いに寄り添いつつ授業実践を展開できるように丁寧に内容を精査する必要がある。

（3）単元における内容の取り扱いと時数の整理

内容の連続性については、昨年度（本校研究紀要第68集, pp. 14-15参照）に引き続き、特別支援学校生活科と小学校生活科の内容を対照し、題材の共通性や目標の関連を確認しながら単元計画を作成した。小学部の単元計画は、単元の目標や評価規準を小学校生活科の目標・内容に対応させて設定し、相当する特別支援学校生活科の内容を併記する形で作成を行った。この単元計画と年間の単元配列表を基に授業を行い検証することで、主な内容の取り扱いについて整理した。

小学部の週時程上の生活科の扱いは表Ⅱ-9のとおりである。全学年共通で、「日常生活の指導」（各教科等を合わせた指導）を実施しており、知的障害教育に欠かせない身辺自立に係る「基本的な生活習慣」については、主に「日常生活の指導」において取り扱い、指導を行っている。また、生活科の授業について、1、2年

（はな組）は各教科等を合わせた指導として実施している。3、4年（つき組）、5、6年（そら組）は、基本的に教科として週2単位

時間で計画して取り組んでいる。直近3年間の単元配列表より、理科につながる内容及び社会科

表Ⅱ-9 「生活科」時数の取り扱い

2023年度実績

	はな組(1,2年)	つき組(3,4年)	そら組(5,6年)
日常生活指導等	約460時間	約349時間	約336時間
授業[合科]	44時間(内「生活」の時間)	1/3時間(15分)	約2時間
授業[教科]		89時間	94時間

2024年度計画

	はな組(1,2年)	つき組(3,4年)	そら組(5,6年)
日常生活指導等	約494時間	約384時間	約384時間
授業[合科]	約38時間(内「生活」の時間)	0時間	0時間
授業[教科]		82時間	82時間

特支	小学校	内容 (名前は検討)	はな38時間 (はなぐみタイム含む)	つき82時間	そら82時間	中学部草案 1学期への繋がり
サ 生命・ 自然	(7)	身の回りの生物(植物)	えだまめを育てよう きゅうりてりりり やさいや植物を育てよう	植物を育てよう (野菜)	植物を育てよう (花)	生命領域 共通性・多様性
		身の回りの生物(虫・動物)	いきものどなかよし(例)	モルモットとのふれあい (合宿に行こう)		
	(5)	校外学習・宿泊学習	どうぶつえんにいこう (R4) おてかけしよう3	合宿に行こう 宿泊学習に行こう	富士山の周りを 探検しよう	地球領域 時間的・空間的 太陽と地面の様子
		季節の変化と生活	季節の変化	水で遊ぼう 季節のコレクション 冬のパーティをしよう	月をかんさつしよう	
シ ものの 仕組み と働き	(6)	物と重さ		物と重さ	物と重さ(例)	粒子領域 質的・実体的 物と重さ
		ものの仕組み	うかぶかな・しずむかな (浮力) 流して遊ぼう ピタゴラ (傾斜)	風の力の働き ゴムの力と働き	つくってあそぼう あきをたのしもう	エネルギー領域 量的・関係的 風とゴム

図Ⅱ-39 理科につながる内容

特支	小学校	内容 (名前は検討)	はな38時間 (はなぐみタイム含む)	つき82時間	そら82時間	中学部草案 との繋がり	中学部学習	
イ 安全 キ 手伝い ・ 仕事 カ 役割 ケ きまり	コ 社会の 仕組み と 公共 施設	(3) 地域と生活		学校周辺の 場所 地形(坂道)	街探検 遠足計画	① 身近な地域 や 市区町村、 都道府県の 様子 位置や空間 的な広がり	身近な地域 について 知ろう 交通 産業	
		(1) 学校と生活	おてかけ しよう 学校・家庭 お店	学校周辺の 場所 (公園) 公共物 公共施設 (図書館)	警察・消防 お店 (スーパー)	② 私達の暮らし に 関わる 身近な地域 の人々 事業や人々の 相互作用	火災から 暮らしを守る スーパー マーケット 防災	
		(4) 公共物や公共施設の利用	乗り物	学校周辺の 場所 (公園) 公共物 公共施設 (図書館)	宿泊学習 都内 駅 ターミナル	宿泊学習 都内外 人	④ 身近な地域 への 社会参加と 仕組み 事業や人々の 相互作用	公共施設 サービス 生活に 関わる きまり
		コ 社会の 仕組み と 公共 施設		昔からあるもの	(9) 自分の成長 と関連 (昔の自分・ 友達)	③ 人々の生活や 身近な地域 の 移り変わり 時期や時間 の経過	道具の変化 身近な地域 の変化 生活環境の 変化	

図Ⅱ-40 社会科につながる内容

につながる内容について図Ⅱ-39、40のように整理した。

検討の結果、理科につながる内容については、「身の回りの生物」で栽培する植物が重なるなど題材に重複が見られた。社会科につながる内容については、公共物や公共施設の学習で扱う内容について重複が見られた。

児童の実態を鑑みると、生活年齢に応じて繰り返し学ぶことが大切な一方で、題材・内容に応じた時数の軽重については更に検討が必要な結果となった。来年度は、「生活科(草案)」で示す目標と内容を踏まえ、時数も含めた生活科カリキュラムモデルの構築を進めていきたい。

3) 授業実践を通じた小学校生活科及び理科、中学部「理科(草案)」との連続性の検討

理科につながる生活科の授業づくりの基本的な要素として挙げた、「観察する(見てみよう!)→疑問をもつ(なぜだろう?)→試行錯誤する(やってみよう!)→振り返りをする(伝えよう!)」を基に検討を行った。

「観察する」については、対象物を視界に捉えること、対象物に興味関心をもてるのが大切であった。はな組では、時間の指導「生活」と「はなぐみタイム」を往還させることで、生活に還るものとして興味関心をもって家庭でも取り組む姿が見られた。

「疑問をもつ」については、自然の不思議さに気付くために大切な要素であった。そら組では、「あきのたまいれ」において、なぜか入りづらい葉っぱを見て悩んでいたが、疑問をもったことで、「上から落とせば入る」ことや「大きい(小さい)葉っぱが入りやすい」ことに気付く姿が見られた。「試行錯誤」については、繰り返し対象物に触れ

て確認する機会が大切であった。例えばはな組では、沈んでいるゴルフボールを手で持ちあげて浮かべようとしたり、ピンポン玉を沈めようとしたりするなど自分なりにやり方を考え繰り返し試行する姿が見られた。「振り返り」については、友達や下級生に伝えたいという思いをもつことが大事であった。例えばつき組では、毎回の授業でワークシートを作成し、友達に発表する機会を設けた。振り返りの発表が次時の意欲や学習の理解につながる姿が見られた。学習の結果も踏まえ、以上のような授業づくりのコンセプトが、中学部で行う理科の学習のための素地となっていくと考える。

「2. 授業づくりの実際」で取り扱った単元の一部は、授業実践の振り返りとして、授業者による単元評価や参加者による授業評価を行っている。今後もカリキュラム評価の中で、単元・授業評価についてのデータを蓄積することで、客観性の高い生活科カリキュラムにおける授業づくりを進めていきたい。また、授業ごとに児童と保護者のエピソードを記録していくことで、身近な生活に生きる生活科カリキュラムモデルとして、知的障害教育では難しいとされている学習内容を、日常生活場面でどのように見方・考え方を働かせているかについて考えていきたい。

さらに、これまでの実践を踏まえ、中学部「理科（草案）」との接続についても検討を重ねてきた。中学部では、小学部・高等部とのつながりも含め、3年間で理科の全体的見方・考え方及び領域を扱うようにしている。具体物を観察することができ、イメージのもちやすい「生命領域」を年度の最初に行い、以降は、「地球領域」、「エネルギー領域」、「粒子領域」について、それぞれの年度で取り組めるように計画している（Ⅲ. 中学部 参照）。そこで、小学部生活科では、主にそれぞれの領域の学習の素地となる1学期の内容との繋がりを検討し、単元配列を工夫していく必要がある。今後は、改めて中学部「社会科（草案）」との連続性も含めて検証しつつ、単元配列の構成を検討していくことも必要と考える。

4) 次年度に向けて

「理科」につながる内容について、今年度は全国質問紙調査の結果も踏まえ、エネルギー領域や粒子領域につながる「シものの仕組みと働き」、内容(6)「自然や物を使った遊び」を主に研究授業として取り扱ってきた。来年度は、生命領域、地球領域につながる内容についても検討を重ねたい。

また、小学校生活科との連続性を鑑み、小学校生活科で示されている内容(8)「生活や出来事の伝え合い」、内容(9)「自分の成長」に関わる学習についても更なる授業実践及び検討が課題である。

さらに授業研究を重ねつつ、知的障害特別支援学校において大事な内容が抜け落ちることないように、これまでの指導の再現性の担保も含めた草案づくりと、その内容を基にした単元・年間計画づくりを進めていきたい。

(文責：Ⅱ-3 田中翔大、田上幸太)

【付記】

本研究は、菊地一文氏（弘前大学大学院教育学研究科）、横倉久氏（全国特別支援教育推進連盟）、吉井勘人氏（山梨大学大学院総合研究部教育学域）、米田宏樹氏（筑波大学人間系障害科学域）の指導助言を受けた。

【文献】

- 文部科学省(2017)特別支援学校小学部学習指導要領, 平成 29 年 4 月
文部科学省(2017)小学校学習指導要領 解説 生活編, 平成 29 年 7 月
文部科学省(2017)小学校学習指導要領 解説 理科編, 平成 29 年 7 月
文部科学省(2018)特別支援学校学習指導要領解説 各教科編, 平成 30 年 3 月
独立行政法人国立特別支援教育総合研究所(2021)基幹研究 特別支援教育における教育課程に関する総合的研究 —新学習指導要領に基づく教育課程の編成・実施に向けた現状と課題— 平成 30 年度～令和 2 年度 成果報告書
筑波大学附属大塚特別支援学校(2023)研究紀要 第 67 集
筑波大学附属大塚特別支援学校(2024)研究紀要 第 68 集
文部科学省(2024)せいかつ☆ 特別支援学校小学部知的障害者用
文部科学省(2024)せいかつ☆☆ 特別支援学校小学部知的障害者用
文部科学省(2024)せいかつ☆☆☆ 特別支援学校小学部知的障害者用
文部科学省(2024)せいかつ☆ せいかつ☆☆ せいかつ☆☆☆ 教科書解説

（文責：田中翔大、田上幸太、宇佐美太郎、當真正太、村木友香、小笠原志乃、萩野谷七慧、門野あすか、末吉玲子）